

19世紀末「最初の日本語学校」を導いたグアン・メソッド 1

19世紀末「最初の日本語学校」を導いた グアン・メソッド

—松田一橋（1906）『日本語教草』から
松宮弥平（1936-38）『日本語会話』へ—

河 路 由 佳

1. はじめに——「最初の日本語学校」

日本国内における最初の組織的な日本語教育機関としては16世紀にキリスト教宣教師によって運営されたコレジオが知られるが、日本側の主導によって日本語学校が開かれるのは、近代になってからのことである。

東京府知事より私立の各種学校の認可を受けた最初の日本語学校は⁽¹⁾、1913年10月に東京市長阪谷芳郎、東京外国語学校校長村上直次郎ほか、在日宣教師同盟、在日米人平和協会、大日本平和協会の代表者らによる理事会によって組織された「日語学校」である。そして、その設立準備過程で、モデルとされたのが、1904年10月に開校した松田^{いさお}一橋（1869-1908）の日本語学校で、「日語学校」はこの学校の教員、生徒を引き継いで開校されたのであった。

本稿の目的は、松田一橋及びグアン・メソッドの果たした役割を近代日本の日本語教育史に位置づけることにある。本稿では、松田がいち早くフランスの言語教育者、フランソワ・グアン（1831-96）によるサイコロジカル・メソッド（以下、グアン・メソッド）に注目し、英語教育・日本語教育での現場に合わせて活用し、その方法を「日語学校」に伝えたこと、そして「日語学校」で後に中心的役割を果たす松宮弥平に、その影響が及んでいたことを検証する。

従来、日本語教育史研究において、「日語学校」開校と同時に中心的役割を担ったのは松宮弥平（1871-1946）であるとされ、松宮が前橋で行った宣教師に対する日本語教育がその前史であるように語られてきた（関1997、山下1998、吉岡2001）。しかし、竹本英代（2002、2004、2007、2008A、2008B、2010）がミッション関係の文献調査によって明らかにしたところによると⁽²⁾、「日語学校」

が先例としたのは松田一橋の学校である。松田は「日語学校」でも指導的役割を期待されていたが、病に斃れ、開校に立ち会うことさえできなかった。

グアン・メソッドについては山口喜一郎（1933）が20ページ余りを割いて紹介し、これによって台湾における日本語教育の黎明をひらいたと説明していることから、山口の実践とともに語られることが多いが、本稿では、19世紀末、国内においても「最初」の組織的な日本語教育の実現がグアン・メソッドともにあったことを明らかにする。

なお、「日語学校」は、本稿では固有名詞として鉤括弧をつけて示す。文献の引用に際して、漢字の字体は現在一般に用いられている字体に改めて示す。また、縦書きの原文を横書きにするにあたって、読みやすさを考え、漢数字を算用数字に改めたり、繰り返し記号はこれを用いずに示したりすることがある。なお、引用文中の〔…〕は、河路による省略を示す。

2. 松田一橋の英語教育とグアン・メソッド

2-1. 松田一橋とグアン・メソッドの出会い

松田一橋^{いさお}は、1869年2月に岩手で生まれ、少年時代、盛岡バプテストミッションを通じてキリスト教の影響を受けた。1888年、19歳で東京英和学校の「英語神学科」（修業年限3年）に入学して英語を学んだ。1890年に来日した宣教師ピアソンと出会い、彼女が東京で暮らした4年間、ピアソンの家で毎週2時間日本語を教えた⁽³⁾。ピアソンによると、当時松田は学校を卒業したばかりで、話し言葉を教えて漢字は教えず、日本語の間違ひは厳しく直したという（竹本2002、p.51）。このころから松田は、中学校で日本人の生徒に英語を教えていた。

松田はドイツのルドルフ・ランゲ（1850～1933）による『Lehrbuch der japanischen Umgangssprache（日本口語教本）』（1890）に関心を寄せ、その教授法習得のためにドイツ語を学び、ピアソンに協力を求めつつ、自分で日本語の文法書を書いていたが、この原稿を焼失した（竹本2002、p.51）。

そして、1892年、ハワード・スワンら（Howard Swan & Victor Betis）によるグアンの英訳『The Art of Teaching and Studying Languages』が刊行されると、松田はいち早くこれに注目して、熱心にその研究と実践に取り組んだ。

2-2. 松田一橘の「英語教授法」(1998)とグアン・メソッド

スワンによるグアン・メソッドの本が出版されて以来6年に渡る英語教育と日本語教育における実践を通して得た知見に基づき、1889(明治31)年、29歳の松田は、『外国語学雑誌』に英文で「How to teach English (英語教授法)」を発表した⁽⁴⁾。日本におけるグアン・メソッドの最も早い紹介のひとつである。松田は、英訳のグアン・メソッドから多くを学び、日本人生徒向けに改良して成果を上げているとして、自らの教授法を具体的に紹介している。

「英文法を熟知していても話すことのできない英語教師が多いのは、その人に教えた教師が悪い。ひいては教授法に問題がある。⁽⁵⁾」と松田は書き起こす。そして、「様々な教授法の中で、グアンのものが最も優れている。心理学に沿ったもので、ペスタロッチやフローベルの学説を発展させたものである。言語習得は、〈以心伝心〉で、直感的、有機的に行われるのである。」と述べる。

単語ではなく文から学ぶ、名詞ではなく動詞から学ぶ、流れに沿った文の連続を学ぶ、読む前によく聞いて発音する、という四つの原則に従って、身の回りのことを英語で表現するために、テキストは身近な場の連続した複数の文のまとまりで示される。生徒はまず、日本語でその内容を理解した上で、動詞を覚え、次に文全体を英語で暗誦できるよう練習する。以上は、グアンの本に忠実な説明だと言える。

続いて、最初の授業と少し先の授業の例が具体的に紹介されている。最初の授業では、まず日本語で文が示される。漢字かな交じりの表記に置き換えて示すと(原文はローマ字表記)、次の通りである。

「朝になる。子どもが目を覚ます。子どもが起きる。子どもが顔を洗う。
子どもが父に行く。『おとつあん、おはよう』と言う。」

教師は、まず口頭で動詞を英語に置き換える。生徒は、それを繰り返し発音して覚え、ノートに書く。次に教師との会話を通して文全体を英語で暗誦する。

教師：It is・・・It is・・・Is it・・・Is it・・・What is it? What is it?

生徒：It is 朝。

教師：Yes, it is 朝。朝 = morning, morning・・・It is morning ; it is morning,

4 専修国文 第101号

生徒：It is morning.

教師：Awakes・・・Awakes・・・Who awakes?

生徒：子どもが awakes.

教師：Yes, 子どもがawakes. 子どもが=the child, the child, the child, the child awakes.

生徒：The child awakes.

このように、生徒はまず日本語を口にし、それを教師が英語に置き換えていくやりとりは24往復に及び、その結果、次の英文が得られる。

「It is morning. The child awakes. The child gets up. The child washes his face. The child goes to his father. The child says, " Good morning, Papa.」

ちなみに、この文は、この2年後に来日したスワンと松田の共著『Japanese Scenes in English』（1902）の最初の課文「It is morning. I get up. I wash my face. I dress myself. I see my father. I say, " Good morning, father.」とよく似ている。スワンの来日まもなく共著が実現した背景には、松田が既に用意していたテキストの存在があったことが推察される。

少し先の授業の例には、日本語の使用についての言及がない。必要がなくなるようである。授業が客観的言語と主観的言語より成るのは、グアン・メソッドの特徴（加えて「比喩的言語」があるとされるが、多く語られるのは先の二つである）である。松田の示した例を日本語に訳して示すと以下の通りである。

客観的言語

- (1) 紳士が友人の家まで車で行く。
- (2) 車から降りる。
- (3) ドアの前に立って、ベルを鳴らす。
- (4) すぐに、メイドがドアをあける。
- (5) 紳士は、友人が在宅かどうか尋ねる。
- (6) メイドは彼がうちにいると答える。
- (7) 紳士はメイドに名刺を渡す。
- (8) メイドは紳士を応接間へ案内する。

主観的言語（山括弧の中は河路による）

- (1) …までお願いします。〈紳士から運転手へ〉
- (2) ここで結構です。おろしてください。〈同上〉
- (3) (友達がうちにいればいいなあ) 〈紳士による心の中のことば〉
- (4) どうぞ、お入りください。〈メイドから紳士へ〉
- (5) ○○さんはいらっしゃいますか？ 〈紳士からメイドへ〉
- (6) はい、中にいらっしゃいます。〈メイドから紳士へ〉
- (7) 彼にこれを渡してください。私は（名前）です。〈紳士からメイドへ〉
- (8) どうぞ、こちらへ。〈メイドから紳士へ〉

「客観的」に書かれたテキストの状況を理解した上で、その状況において発せられるであろう「主観的」な言語、すなわち台詞（心の中のことばも含めて）が示されている。つまり、状況の説明文とその状況における会話文である。

グアンの著作では、主観的言語は「That's right,」「It is true,」「I wish to…」というように教師が生徒に語りかける言葉と説明され、そのあと生徒同志でも同様の会話をしつつテキストの暗誦することとされている⁽⁶⁾。山口（1933）はこれに忠実に「ウマイ、それから」「それはよろしい」「私は…を望む」と言うのだと紹介している（p.481）。主観的言語は、テキストには書かれず、教室での教師の裁量に任される。上記のような会話方式は松田による応用であると考えられる。仮に「松田式」と名付ける。

このように紹介してきて、最後に松田は、この新しい方法を「従来の方法」と比較するが、それを表にすると次のようになる。

従来の方法	新しい方法（グアン・メソッド）
非現実から引き出した単語を学ぶ	現実に即した文を学ぶ
ある言語の単語を新しい言語に訳す	表現や考えを直接新しい言語に移す
恣意的で空想的なテーマ	普遍的で現実的なテーマ
機械的に練習する	直感的かつ有機的に練習する
目で記号（文字）から学ぶ	耳で音から学ぶ
読み、翻訳、会話を別々に学ぶ	読み、翻訳、会話を関連づけて学ぶ

松田の文章は、次のように閉じられる。

「どちらがよいかの判断は読者にゆだねる。この方法が、言語教育を改善し、日本で無惨にも命を奪われた英語教育の復活を助けるものであらんことを。」

2-3. グアン・メソッドの英訳者スワンとの交流

グアン・メソッドの英訳者スワンが、神田乃武（1857-1923）の要請を受けて来日するのは1901年のことである。神田は1899年4月から1年ほど東京外国語学校の校長を務めたが、その年、松田も同校の英語講師を務めている⁽⁷⁾。松田はその後、神田と同じ学習院で英語講師を務めた。神田が松田とスワンを引き合わせたのではないと思われる。

スワンは1902年7月25日から8月14日にかけて文部省が東京高等商業学校において開催した英語教員のための夏期講習会でグアン・メソッドを説いた。その様子は、『中外英字新聞』9巻14号（1902年8月）に同講習会の参加者によって次のように報告されている⁽⁸⁾。

〔氏の教授法は〕想像力に重きを置くのであつて、在来の読本などに依るのでない。〔…〕書生々活に就て。其仕組の一般を云ふて見やうなら。教師は最初に最も生徒の連想に近き処の状態を語てきかせ。生徒の脳裡に十分想像を描かして。思想を活動さしておき。夫れから身振で書生が朝。目をさまし欠伸をなし。手を伸ばし。立ち上り。シャツを着。着物を引かけ。帯をしめ。髪を櫛り。顔を洗ひ。室内運動をやり。食事をすまし。書籍を整へ。靴を穿ち。学校に出かける等を模倣するのである。一身振毎に一働詞を授け順を追ふて終りに至り。一章中決して他の事柄を例にひかない。〔…〕 Subjective languageの時は出来得る丈け例を変ゆることになつてゐる。此方の語はI remember, I think so, Speak long.と云ふ如き無形のものである〔…〕凡て働詞の順序を追ふて繰り返へさせ略ぼ記憶した時分に。其働詞を用ゐて一章句（センテンス）を造り順に教へ行く事に成てゐるので。流石は良法。覚え易く出来てゐる。併し従来の教授法（殆ど一定の教授法はなかりしが。其大概を取りてありとするも）よりも余程實力を要す

るのである。之が果して。実行し得らるゝや否や疑問である。

報告された教授法は『The Art of Teaching and Studying Languages』に沿ったもので、主観的言語は、教師と生徒が教室で交わすことばである。教師の裁量が大きいつ分、実行可能性に疑問が呈されている。

同じくスワンの説明を見聞した高橋五郎(1903)『最新英語教習法⁽⁹⁾』には、

スワン氏などが用ひるるゲ〈ゲ〉アン式は如何んと、曰く可なり。然れども教科書を用いて之を為すの勝れるには若かず、グアン式を用ふる人々は、何か一の光景——例へば修学旅行——を想像して学生の前に連続した一場の会話を持ち出すを常とす、スワン氏の如く演劇の脚色に巧みなる(?)者はいざ知らず、然らざる人々は非常に苦勞して而も其結果は虎を画て猫となる者比々皆是なり、然のみならず彼徒は頻りに其visualizationを喋々すれども、従来の好会話書は皆是人生各般の場合を想像して其時々に必要な連続した会話を掲げたる者なり、曰く朝起の話、曰く昼飯の話、曰く宿屋の話、曰く汽車の場、皆是れvisualizationなり、只此は精鍊したる者にして書中に掲載せられ、彼は出放題にして口頭に存し、音声と共に永く消え失するの差ある而已、[…]

とあって、状況に応じた「演劇の脚色」による「一場の会話」という表現からは、先に松田が示した場面会話が彷彿とする。そして、松田による改良が必ずしもスワンの指導から乖離していなかった可能性をも思わせる。しかし、従来のよい会話教材に洗練された場面会話が書かれているのに比べ、書かれたものが示されないことに、高橋は否定的である。

スワンの紹介したグアン・メソッドの、テキストに書かれていない「主観的言語」は、演技力に優れた教師によって実演された場合、説得力のあるものではあったが、一般の英語教員にとっては困難であると認識されたようである。

先に「松田式」と名付けたのは、会話のテキストが示されていた点に注目したものである。「英語教授法」の文中で教室談話を書き起こしたものと読むこ

ともできるが、松田の授業で特定の状況を描写した文章とその状況における場面会話が並行して扱われていたことを示している。このことは、生徒に示すかどうかはともかく、会話テキストが用意されていたことを示唆している。

2-4. スワンとの共著『Japanese Scenes in English』(1902)

1902年9月、松田一橋はスワンと共著で『Japanese Scenes in English : Practical Lessons in the Use of English for Japanese Students (英語による日本の場面—日本の生徒のための実用英語)』を博文館より出版した。中表紙の著者の肩書きに、スワンは東京高等商業学校教授、松田は学習院英語講師とある。この教科書は、書名のとおり、日本の生活場面で構成されている点に特色がある。グアン・メソッドを日本人生徒に適用するにあたって、生徒に身近な場面を想像させるのが、外国の場面を用いるよりも教師にとっても扱いやすく効果的で、日本で暮らす欧州人が日本の生活を英語で表現するにも役立つと考えられた。DAILY LIFE (1~10課)、SCHOOL LIFE (11~20課)、TRAVELLING (21~30課)、SOCIAL LIFE (31~45課)によって構成されている。

スワンによる前書きに、「各課は、松田による編集で、いずれも英語で表現される (A) 日本人、(B) 日本で暮らすヨーロッパ人 の二つの部分で構成されている」とあり、各課、二つの課文で構成されている。前書きにグアン・メソッドによる教授法として、「まず日本語で場面を描写し、文章の日本語訳を大きな声で読む」に始まり、動詞をとりあげてその英語を覚え、徐々に全文を暗誦してからそれを書き、「異なる時制を使って主題に関する作文をする」までの一連の流れが説明されている。主観的言語、会話については言及はなく、このテキストを翻訳のための読本として使ってもかまわない、との説明がある。

そして、興味深いことに、このテキストの次に“English Scenes and Conversation”という会話用テキストが続くと書かれている。実際には刊行されなかったが、会話テキストが用意されていた可能性を示すものである。

3. 松田一橋によるグアン・メソッドの日本語教育への応用

3-1. 松田一橋の日本語学校の開校（1904）

個人教授などで日本語教育の実践を積んだ松田一橋は、1904年10月に外国人のための日本語学校（The Japanese School for Foreigners）を開校した⁽¹⁰⁾。日本人の中で働く外国人がその対象とされ、生徒は宣教師のほかビジネスマンや領事館勤務者などで、銀座メソジスト教会で授業が行われた。出身地はアメリカが大半を占め、ほかにカナダ、イギリス、ロシア、フィンランド、オーストラリア、ドイツ等。「本科2年、高等科1年以上、3学期制、土日、祝日は休み」で、授業内容は次のとおりであった⁽¹¹⁾。

本科	1年 2年	会話（6）、読方・翻訳（5）、文法・練習（2）、書方・書取（2） 上記に加えて 作文、漢字学習
高等科		話方練習（3）、英文和訳（3）、読方・意訳（3）、文語文法・日本文学（2）、漢字学習（4）、作文（週1回）

「会話」が「読方・翻訳」に先だって、より多くの時間数があてられているのを見ると、「松田式」の場面会話が扱われた可能性がある。そうでなかったとしても、テキストなしに一体化して行われるという「グアン・メソッド」とは違って、テキストが用意されたのではないだろうか。グアン・メソッドは、すべての学習を一体化すると説明するが、松田のカリキュラムは従来の枠組みを生かしてそれぞれの言語技能を習得させるべくわかりやすく示されている。

松田は学習院で英語を教えていたが、1906年にこれを辞し、日本語学校の校長となった。竹本（2002）によると、松田の学校の生徒数は1906年に「約40名」で、学期ごと（10月-12月、1-3月、4-6月）に変動があったが、2013年10月に「日語学校」に引き継がれたときの人数は46名であった。

3-2. 松田一橋の日本語教科書、『日本語教草』（1906）

開校2年後の1906年に、グアン・メソッドを日本語教育に応用した教科書、Isao, K Matsuda “Text-Books of Japanese Conversation, No.1”、松田一橋『日本語教草 卷二』（教文館）が出版された。前者には、著者の肩書きとして「Principal of the Japanese Language School for Foreigners in Tokyo（東京の

外国人のための日本語学校校長)」と書かれている。

スワンとの共著『Japanese Scenes in English』と松田の“Text-Books of Japanese Conversation, No.1”（以下「No.1」）『日本語教草 卷二』（以下、「卷二」）の構成や課文は符合しており、関係は緊密である。松田は、英語教育での経験をそのまま日本語教育に応用したことになる。

松田による二冊の教科書は、「No.1」がローマ字書き、「卷二」が縦書きの仮名書きで、目次、本文は同一である。「No.1」は、各課本文のあとに、「Verbs（動詞）」として、動詞の基本形を抜き出し、課に応じてその動詞の活用や助動詞のついた形を示し⁽¹²⁾、「Questions（質問）」として、日本語による内容確認の質問がある。仮名書きの「卷二」には10課のあとに片仮名の練習と五十音表、15課のあとに片仮名平仮名の練習、20課のあとは平仮名の練習、25課のあとは平仮名による「いろは歌」と練習、30課、35課、40課のあとにはそれぞれ「かへがな（変体仮名）」の練習が加えられ、合計27の変体仮名が紹介されている。最後に「ひらがな」「かへがな」の対照表があるが、「え・お・そ」は現在使われている形が「かへがな」表に、今日変体仮名と考えられている字体が「ひらがな」表に載っており、1906（明治39）年という時代が、なお「国語」の建設途上であったことを思わせる。目次を、漢字を用いた表記にして示す。

篇	章	細目（掲出順）	*括弧内は河路による注記
第1篇 一日の事	1～10	朝、朝飯 ^{あさはん} 、朝飯過ぎ、訪ね、引き合はせ、散歩、買物、車（人力車）、手紙、晩	
第2篇 旅行	11～20	旅立ち、停車場、汽車、宿屋、見物、海辺、野遊び、うち（室内）の遊び、帰り、船	
第3篇 人の一生(上)	21～30	婚礼、普請、転宅、下女、仕事、注文、買物、料理、膳立て、払い（月末の支払い）	
第4篇 人の一生(下)	31～40	誕生、誕生祝ひ、進物、仕立て屋、（宴会出席の）身支度、宴会、病気、臨終、葬式、子どもの生い立ち	
第5篇 連句法	11～40	短文を並べた各課の本文の全体を、接続詞などを適宜用いてひとまとまりの文章にしたもの。	

これをスワンとの共著『Japanese Scenes in English』と比較すると、SCHOOL LIFE（11～20課）が丸ごと削除され、SOCIAL LIFE（31～45課）に、「病気」「臨終」「葬式」「子どもの生い立ち」が加わっている。松田の教えた英語学習

者は学校の生徒で、日本語学習者は成人であったことによる配慮と理解される。

「No.1」の「序文」によると、テキストは3分冊で構成され、ローマ字による1冊目、かな書きによる2冊目に加えて、3冊目は「本文の英訳、文法解説、会話練習、語彙（日英、英日）」であると説明されている。1冊目が「No.1」、2冊目が「卷二」に当たるが、3冊目は出版されなかった。原稿に関する情報も得られず、内容は確認できていないが、テキストに「会話練習」が含まれているのが興味深い。「No.1」で、テキストの内容確認の問答が扱われているから、三冊目の会話はこれとは異なるものだろう。グアン・メソッドでは書かれない「会話練習」が、三冊目の教科書に書かれていること自体が、松田による「改良」にはかならない。もしそれが「松田式」の場面会話であったとしたら、教師の裁量任せで現実的ではないとされた批判を退け、「従来の好会話書」の良さを兼ね備えたことになる。それは、この教授法に対して指摘された問題点を克服するひとつの方法であったと言えるであろう。

3-3. ミッションによる「日本語学校」設置計画と松田一橋

竹本（2004）は、在日宣教師同盟による年次出版物“The Christian Movement in Japan”の記述から、「日本語学校」設立に至る経緯を丁寧に述べている。在日宣教師同盟では、その20年前から日本語教育について議論していたというが、「日本語学校」設置への本格的な議論は1904年1月に開催された在日宣教師同盟の第3回総会において始まった。その年の2月には日露戦争が始まり、翌1905年9月に日本の勝利で終結すると、欧米からの日本への関心は飛躍的に高まる。宣教師同盟が日本語学校建設計画を本格化するのには、この時期であった。

1905年1月、在日宣教師同盟の第4回総会において、ワイコフが、松田一橋の日本語学校を紹介、同盟は、松田に学びつつ日本語学校の設立準備をしてゆくことになった。1906年1月の第5回総会では、ワイコフは松田との会談内容を報告、来日宣教師が十分な日本語能力を習得できる学校の設立計画具体化への提案を行った。その中に、「松田の学校が言語研究課程を作成しているのに倣って、各教派の語学試験に基づく言語研究課程を作成すること。」「卒業後も日本人教師について勉強を続けられるよう、言語教育能力を有する有望な若い

日本人女性を雇用し、松田の学校で特別に勉強させること」が含まれており、松田の学校への信頼がうかがえる。

翌1907年1月の第6回総会では、学校運営のシステム作りに向けての松田の意見がとりあげられた。松田は自分の学校が将来、計画中の日本語学校に発展吸収されることを前提に、各教派に属する委員に、松田の学校に来てその教育の実態を調査の上、意見交換することを要望した。

松田は、しかし「日本語学校」の設立を待つことなく、1908年11月、結核で39年の生涯を閉じる。日本語学校は、チーフ助手であった田口（旧姓：安部）タカノに引き継がれた。1910年の総会では田口の学校の授業内容が紹介され、1911年1月の第10回総会では、田口の学校で学んだ宣教師が2年間で会話も読み書きもできるようになり、在日宣教師同盟にとって満足できる成功を収めたと報告された。科学的な教授法を否定してきた古い宣教師たちも、田口の学校の方法を認めたという。「松田式」グアン・メソッドが認められたと言える。

4. 「日本語学校」の開校（1913）

4-1. 開校当初の「日本語学校」

やがて、1911年1月に発足した在日米人平和協会（APJS）、大隈重信を会長とする大日本平和協会（JPS）も協力し、1912年の春、日本語学校設立委員会が設置された。委員12名のうち、7名はアメリカ、カナダ、イギリスの宣教師（在日宣教師同盟、APJS会員）残る5名は姉崎正治（東京帝大文化大学宗教学講座教授）、福岡秀猪（東京外国語学校教授）、村上直次郎（東京外国語学校長）、樋口勘治郎（早稲田大学教授）、阪谷芳郎（東京市長）であった。彼らは、「田口の学校のような私的なものではなく、組織された連合学校」を目指した。村上の斡旋で、東京外国語学校の教室を使って授業が行われることになった⁽¹³⁾。

こうして、東京府知事より私立各種学校として認可を受け、日本の官立学校で25年間英語を教えてきた宣教師ミューラーを校長とする「日本語学校」が、1913年10月に開校した。それと同時に、田口の日本語学校の教師も生徒も「日本語学校」に引き継がれ、松田の開いた学校は発展的解消を遂げたのである。

1913年12月19日、「日本語学校」の開校を伝える「東京朝日新聞」の記事に授

業の様子が取材されている。「教師は教会関係の男女八名で田口八郎氏の如きは夫婦連で教鞭を取つて」おり、記者が参観した宣教師科の授業では「教師田口八郎氏はセルの袴に雪駄履きと云ふ純日本風で教壇に立ち」、黒板を指して、「今日はどんな天気ですか」というと、生徒は「今日は好い天気ですが少し御寒う御座います」と答え、その会話を「耳に沁込むまで何遍も何遍も繰返して吹き込む」。そして、「大体暗誦が済むと『ウエバーさんの奥様とカルソンさんの奥様とで云つて御覧なさい』と云ふ風に生徒同士で問答させる」。「教科書は小学読本や朝鮮総督府編纂の普通学校国語読本其他である」と書かれている。竹本（2007）には、1913年度の教材一覧が示されており、1年目1学期の「読方と翻訳」に『尋常小学読本』巻1、2が使われているのが確認できる。

4-2. 「日本語学校」における教育課程とグアン・メソッド

「日本語学校」の日本語の授業は、本科は午前9時から午後5時まで週15時間、速成科は午後5時以降週2時間で、内訳は次のとおりである（竹本2004、p.47）。

	1年	2年	3年
本科	発音、聴方、読方、書方、話方、綴方、習字	講読、会話、口語文法、作文、習字	講読、会話、演説、文語文法、作文、習字
速成科	発音、聴方、読方、書方、話方、綴方		

このほか週に1回、日本の歴史・文学・宗教・制度・風俗などに関する講義が行われた。竹本（2007）には1913年度と1917年度の学期ごとの使用教材の表が掲げられている。1年目1学期、「文法」には松田も初期に使っていたランゲの教科書が、そして「会話」には松田の「No.1」「巻二」が使われ、「書方と書取」でも、松田の「巻二」の片仮名、平仮名が使われている。

松田の教科書は1年目の2学期にも継続して最後まで使われ、あわせて教師や生徒同志で自由会話をすると書かれている。「日本語学校」の1年目の1学期、2学期、即ち日本語の入門課程は、松田の影響が強く、「松田式」グアン・メソッドが適用されていたものと考えられる。

「日本語学校」の開校と同時に、松宮弥平が日本語教師として着任するが、初

年度に松宮が担当したのは最上級クラスの「祈祷文」で、文語による祈祷文を読み解いて説明する授業であった。入門課程は松田の学校から引き継がれた教師に任されていたのである。「初心者クラス」を担当したのはミュラーと、田口八郎と、田口タカノの姉妹にあたるMiss Abe（阿部）であった。田口と阿部の授業について、ミッションの報告書は次のように伝えている⁽¹⁴⁾。

タグチとアベはパフォーマンスをしながら日常会話のセンテンスを日本語で話し、それを生徒は何度も口頭で繰り返して獲得していった。その後、生徒はセンテンスに出てきた単語の片仮名と漢字の書き方を学び、次に教師は黒板に平仮名と片仮名と漢字を書き生徒はそれを練習した。最後にその日に教えられたセンテンスが書かれたカードが生徒に手渡された。カードには英語と日本語が表記され、生徒は個人学習と復習のためにそのカードを利用した、この初心者クラスの教え方は、日語学校でも最も申し分ない（Almost ideal）教え方と言われていた。

田口と阿部によるこのカードの用法は、松田の学校で現場に即して彼らが練り上げたものだったのではないだろうか。なお、「日語学校」の課程は3年目3学期まで綿密に組み立てられており、「読方と翻訳」では、3年目の2学期に巻12を終えるまで『尋常小学読本』が通して使われ、2年目の3学期からは「創世記」「説教」「讚美歌」「聖書」などキリスト教の文献も用いられる。「書方と書取」の2、3年目では、毛筆の書体を扱うチェンバレンの『文字のしるべ』も使われ、充実した授業の様子がうかがえる。

5. 松田一橘と松宮弥平

5-1. 松宮弥平と「日語学校」

松宮弥平（出生時の名は近澤武雄）も少年時代からキリスト教の感化を受け、1895年、アメリカン・ボードの宣教師ノイスが前橋で英語を教え始めると、その補助者として働いた。1897年に旅館鍋屋の松宮志人と結婚、宣教師に日本語を教え始めた。長男、松宮一也による回想記に、カナダの宣教師キャロライン・

マクドナルドが鍋屋に泊まり込んで松宮弥平に日本語を学んだ日の思い出が綴られており、彼女の「日本語の上達は素晴らしく、会話の流暢になったことには驚くべきものがあつた（松宮一也1942、p.300）」と書かれている。竹本（2010）によると、これは彼女が1911年12月に二度目に来日した時のことで、1904年12月に初めて来日したときは、翌1905年から松田一橋の日本語学校で週に5回日本語を学んだのであった。自宅学習も熱心に行った結果、6か月後にはアメリカ・メソジスト監督派の日本語試験に好成績で合格した。基礎は松田の日本語学校で教わっていたのである。

1911年、前橋で松宮一家と暮らしたマクドナルドは、松宮が旅館の仕事より日本語教授に専念したいと考えているのを知り、「日語学校」の設立計画にかかわっていたYMCAのフィッシャーに相談した。松宮弥平が1912年に一家で上京したのは、フィッシャーらが「日語学校」に松宮弥平を教師として迎え入れる約束をしたからである。「日語学校」開校までの間、松宮は自宅に教師を雇って日本語塾を始めるが、マクドナルドは再びここに通って日本語を学んだ。松宮の授業はすべて日本語で行われた。そして、1913年10月に「日語学校」が開校すると、松宮弥平は約束通り「日語学校」の教師になったのだった。

5-2. 松田一橋と松宮弥平の生きた時代

松田一橋（1869-1908）と松宮弥平（1871-1946）は、2歳違いでともに明治初期に生まれたキリスト者である。二人とも19世紀末、20代でキリスト教宣教師の支援から日本語教育に関わるようになり、やがてこれを職業とした。共に20代で日清戦争を、30代で日露戦争を経験した。しかし、東京での日本語教師としての活動の時期はずれている。松田は35歳で日本語学校を創り「日語学校」準備に関わりながら39歳で早世し、松宮は松田の死後、41歳で上京して「日語学校」が創設されるとここで教えはじめ、1946年に75歳で亡くなるまでの30年余りを日本語教育に尽力した。以下に二人の略歴を並べて示す⁽¹⁵⁾。

	松田一橋	松宮弥平
誕生	1869年2月、岩手にて。	1871年2月、愛媛にて。
入信	少年時代に盛岡ミッションを通じて影響を受け、1886年に浸礼。	1885年にキリスト教に入信。
日本語教授の開始	1890年、東京でピアソンと出会い、彼女の日本語教師に。	1893年ごろから、前橋で宣教師への日本語教授開始。
日本語教師の前の仕事	1890年頃から中学校等で英語を教える。東京外国語学校、学習院でも英語を担当する。	松宮しんの婿養子になって旅館鍋谷を経営する傍ら群馬新聞を興し、書店経営。伝道活動。
日本語教科書以前の著作	1898年、『外国語学雑誌』に「英語教授法」を連載。1902年、H.スワンと共著で『Japanese Scenes in English』刊行。	本名の近澤武雄名で1894年に伝道書『愛を論ず』『小さき母—上毛孤児院』のほか、1896年には『食事時』（デュエイの翻訳）。
日本語学校の開校	1904年、メソジスト教会内に、日本語学校創設。	1912年、上京。麹町の自宅で日本語塾を開く。
出版した日本語教科書など	1906年“Text-Books of Japanese Conversation, No.1”『日本語教草巻二』	校内用の謄写版の教材多数。1936年『日本語教授法』。『日本語会話巻1～3』（1936-38）
日本語教育への貢献	1905年、在日宣教師同盟の総会にて日本語学校設立のため、既に日本語学校を運営している松田の経験に学ぶこととされ、松田はこれに協力。「日語学校」開校後、松田の学校の教師らが「日語学校」に引き継がれた。	1913年、「日語学校」(1930年に日語文化学校と改称)設立と同時に教師に就任。1914年より日本語教授法講習会。1921年、松宮日本語学校を設立。1933年に日語文化学校に国語部長として帰任。1939年財団法人日語文化協会設立、「日本語教授研究所」所長。東亜への日本語普及にも尽力。
逝去	1908年11月、結核にて。39歳	1946年7月、脳溢血にて。75歳

5-3. 松田一橋『日本語教草』と松宮弥平『日本語会話』

松宮弥平の『日本語会話』（1936-38）は全3巻からなるが、吉岡（2002）は「弥平の日本語教育の特徴は入門期にあると考えられる。（p.110）」との見地から、「巻一」に絞って文法学習項目を中心に分析し、「巻二」「巻三」については「学習項目は巻一のように明確ではなく」「理念や編纂意図が伝わってこない。（p.110）」と述べるのみにとどめている。

本稿では、特定の場面の短文の連続による本文で構成された「巻二」「巻三」に注目し、グアン・メソッドによる松田一橋『日本語教草』との関係を分析し、

グアン・メソッドの影響を考える。

「巻二」「巻三」の目次を見ると、同じテーマが複数の課にわたって扱われているものが多い。例えば、「巻二」では1課から6課までが「電車（1）」から「電車（6）」である。また、「巻二」の第7課は「訪問」だが、第13課から20課も「訪問（1-7）」である。また「買物」は本屋、八百屋、果物屋、卵屋、氷買、呉服店、とそれぞれ別になっている。が、ここでは、それらを区別せず、松田の『日本語教草』に従って「一日の事」「旅行」「人の一生」に分けて、特に話題や場面に類似性のあるものを課のタイトルで示す。

	松田（1906）『日本語教草』	松宮（1936・38）「巻二」「巻三」
一日の事	訪ね、引き合はせ、散歩、買物、車（人力車）、手紙	訪問、初対面、散歩、買物、自動車、手紙
旅行	停車場、汽車、宿屋	停車場、電車、汽車、宿屋
人の一生	普請、転宅、下女、払い、仕立て屋、病気	修繕、引越、女中、勘定、呉服店、病気、見舞（病気）

一方、それぞれに独自のものとしては、松田の『日本語教草』では「人の一生」において「誕生」「婚礼」「臨終」「葬式」など、人生の最初から最後までにかかわる「動詞」を扱おうとするグアン・メソッドの意図が見えるのに対し、松宮の『日本語会話』では、「電話」で電話のかけ方、「行先」で道の尋ね方、「郵便局」では電報の打ち方や小包の送り方など、実用的な「会話」を示す意図がうかがえる。

5-4. 松宮弥平（1936-38）『日本語会話』におけるグアン・メソッドの影響

両方に存在する「停車場」を例に、本文を並べて、両教材を比較してみる。

松田『日本語教草』第12課	松宮「巻二」第13課
(1) タビビト・ガ テイシヤバ・ニ ツク。 (2) キップ=ウリバ・ヘ イソイデ ユク。 (3) ソシテ『カマクラ ニトウ イチマイ』と イフ。 (4) キップ=ガカリハ キップ・ラ ウル。	一. 私は 内を出て 停車場へ まゐりました。 二. 電車を まつて居ると、小山さんが お出でになりました。 三. 私は 小山さんに「ああ、しばらくで ございました」と 申しました。 四. 小山さんも「やあ、しばらくでございました」と おつしやいました。 五. 私は「今日は どちらへ お出ででございますか」

(5) タビビト・ハ ニモツ・ヲ キシヤ・ニ あヅケル。	と たづねました。 六. 小山さんは「はうい、ちよつと 神田まで まるります」と お答へになりました。
(6) トキ・ニ・ハ トモダチ・ニ デンパフ・を かケル。	七. 私は「さやうでございますか。私も神田へ まるりますから、ごしよに まるりませう」と 申しました。
(7) ソレ・カラ キシヤ・ニ のリコム。	八. その中に 電車が 来ました。 九. 二人とも 急いで 電車に 乗りました。

両者の類似点として①ある場面の連続した流れを描く複数の文で構成されている、②一文ごとに番号が振られている、③すべての文が動詞文である、④分かち書きされている、⑤文末の動詞の重なりがない。または、少ない。⑥文中に鍵括弧で台詞が含まれる箇所がある、という点が確認される。

相違点を次の表にまとめて示す。

相違点	松田『日本語教草』	松宮『日本語会話』「卷二・三」
文末	「スル」の形。動詞の辞書形。現在の形	「しました」の形。動詞の「ます」形+タ形。過去・完了の形
文体	普通体	丁寧体
人物(人称)	旅人と切符係の人(三人称)	私と小山さん(一人称)
敬語	なし	すべての文で使用。
会話	7文のうち1つ。	9文のうち5つ。
文字	片仮名の一部に平仮名。	漢字と平仮名。

松宮教材では、教室でこの会話体の部分のみを抜き出して会話練習をすることと、本文の文章を読むことが平行して行われていたであろうことが想像に難くない。松田の『教草』は、書かれているセリフは「鎌倉、二等、一枚」のみであるが、「松田式」に従うと、この場面で旅人と切符係の会話が紹介されるはずである。

松宮の『日本語会話』「卷二」「卷三」は、現在一般的な戯曲風(台詞の連続で構成される)の会話文ではなく、台詞が文章に組み込まれているのが、今日見る者に違和感を感じさせるが、松田の教科書を通して「客観的言語」と「主観的言語」をともに学ぶグアン・メソッドの影響を受けていたと考えれば、その謎は解ける。

1922年に英国の英語教育者ハロルド・パーマーが来日し、文部省より英語教

育顧問に任命された。パーマーの提唱したのは、媒介語を用いずに教える直接法で口頭練習を中心に学ぶオーラル・メソッドであった。英語教育に関心の高かった長沼直兄は彼と親交を結び、オーラル・メソッドによる英語教科書作成を手伝ったのち、それを日本語教育に応用して実績を重ね、『標準日本語読本 巻一〜七』（1931-34）を著わした。このオーラル・メソッドのパーマーと長沼の関係は、グアン・メソッドのスワンと松田の関係とよく似ている。日本における日本語教育は英語教育のために導入された外国語教授法の大きな影響の下に組織されたのである。

こうして、1920年代はオーラル・メソッドが影響力を持ち、やがて国策としての海外への日本語普及の進展に伴って、日本語研究者らによる日本語の基本語彙や基本文型、表現文型などの調査研究も進むと、グアン・メソッドは影を潜めた。松宮の『日本語会話』は、この狭間にあって両者の影響を受けつつ、どちらからも少し距離をおいている。

6. 終わりに——近代日本の日本語教育とグアン・メソッド

日本語指導におけるグアン・メソッドといえば直接法の一つと説明されることが多いが⁽¹⁶⁾、見てきたとおり特に入門期には媒介語の使用が前提とされている。19世紀の終わりから20世紀始めにかけて、サイコロジカル・メソッドとも呼ばれたグアンによる教授法は、広く影響力を持ち、来日したスワンによる講演や実演に触れた多くの人々は、力量ある教師によって行われたなら、効果のあがる教授法であることを認めたが、「主観的言語」とされる会話の部分にはテキストがなく、教師の裁量に任されるとされる点が、一般の英語教師には実用困難とされた。

英語教師であった松田一橋は、スワンによるグアン・メソッドの英訳が出るとすぐにこれを英語教育と日本語教育に応用し、改良を重ねて実用性を高め、「最初の日本語学校」とされる1913年創立の「日語学校」のモデルとなる日本語学校を1904年に開校した。

グアン・メソッドといえば、従来、山口喜一郎（1933）が台湾における最初の実践にこれを応用して成果を上げたとしてのみ語られるのが「通説」となっ

ている⁽¹⁷⁾。しかし、この時期の日本におけるグアン・メソッドの影響は、より広範囲に及んでいた。長谷川（2010）は、明治29（1896）年に、英文学者で英語教育者であった本田増次郎（1866-1925）が、嘉納治五郎（1860-1938）の私塾で前例のない最初の清国留学生の日本語教育に従事した際に「グアン・メソッド」と「筆談」を用いたことを、本田が1918年に書いた回顧録⁽¹⁸⁾に基づいて明らかにしている。本稿では、これに加えて19世紀末からこれに注目して研究を重ねた松田一橋が、宣教師ら欧米人の成人を対象とした日本語学校においてこれを改良して優れた実践活動を展開し、1913年に設立された「日語学校」でも入門期を中心に、この方法が用いられていたことを示した。

19世紀末に、国内外で様々な学習者を前にほぼ同時に啓かれた「最初の日本語教育」の担い手が、それぞれグアン・メソッドに基づいて現場に即したよりふさわしい方法を練り上げていったことは、興味深い事実である。

注

- (1) 日語文化学校の『昭和八～九年度 日語文化学校報告書』にはその前身たる「日語学校」の設立を「文部省の認可」としているが、1880年の「教育令」改正以降、戦前期を通して、私立各種学校の設置認可は府県知事によって行われた（土方苑子編2008、p.59）。19世紀末から日華学堂（1898年設立）、亦楽書院（1899年設立、1903年に宏文学院と改称）など中国人留学生を対象とした日本語教育機関が存在したが、留学生教育機関であったためか、欧米人向けの日本語学校と同じ範疇に属するとは考えられていなかったようである。
- (2) 竹本英代による一連の論文によって、松田一橋の日本語学校開校への経緯、「日語学校」の設立準備から開校に至る過程、「日語学校」が震災をくぐって1930年に「日語文化学校」と改称し、やがて松宮弥平を中心に事業を拡張していく過程が明らかになった。本稿はこの成果に負うところが大きい。
- (3) 竹本（2002）によると、ピアソンはアメリカ聖公会婦人宣教師として来日、最初の5年間は立教女学校に勤務した。慶應義塾のウィグモア教授から

松田を紹介された。

- (4) 『外国語学雑誌』第2巻第5～7号(1898年5～7月)。この文章は、大村・高梨・出来編(1980)の「盛んな英語教授法の研究」の章に、年代の早い方から2番目に掲載されている(pp.146-156)。斎藤秀三郎、坪内雄蔵、浅田栄次ら著名な筆者の中で、解説に「松田イサヲ(功?)」と書かれた松田は無名だといえるが、これが英語教育史の上で看過できないものであることを示している。
- (5) 翻訳は河路による。適宜、意を汲んで要約した部分がある。以下同様。
- (6) A.P.R.Howatt and Richaed G. Smith 編(2000) *“Foundation of Foreign Language Teaching Vol.VI Gouin, François”* 所収 “The art of teaching and studying Languages” p.53.
- (7) 松田は、神田乃武が東京外国語学校校長を務めていた1899年9月に英語科講師(教授は浅田榮次と村井知至)、同年12月に解職(『東京外国語学校史』p.313)。
- (8) 大村、高梨、出来編(1980) pp.358-361所収。筆者は匿名(「大蛙生」とある)。
- (9) 大村、高梨、出来編(1980) pp.114-129所収
- (10) 竹本(2004) p.35。
- (11) この表は、竹本(2002) p.58掲出の竹本による表に基づいている。
- (12) 例を挙げると、第一課は「できる…でき、できます」、第四課は「あう…あい、あいます、あいました」、第14課は「たのむ…たのみ、たのみたい、たのみとう、一たく」、第27課は「よる…より、よって、よったら」、第31課は「やとう…やとい、やとわせる、やとわれる」など、易から難へ、動詞の用法が取り上げられ、日本語文法が学べるようになっていく。
- (13) 東京外国語大学文書館所蔵の1917年の東京外国語学校の正門の写真には、右側に縦書きで「東京外国語学校」、左側には横書きで「日語学校」その下に「JAPANESE LANGUAGE SCHOOL」と書かれた看板が見える。ここで授業が行われたのは1918(大正7)年9月までの5年間で、その後は、1936年に芝に校舎が建つまで、基督教関係の場所を転々とした。

- (14) 竹本 (2011) p.56より。Fanny Ensworth Griswold “Tokyo Japanese Language School” Misshon News, 17-3 (1913.12, pp.48-49) に基づくと注記されている。
- (15) 松宮弥平の年譜は、(財) 言語文化研究所の山下秀雄氏が、松宮一也の娘、吉田百合子氏の談話を参考にまとめた年表も参照した。
- (16) たとえば小林ミナ (1998) pp.159-163ほか、日本語教授法に関する多くの著作に同様の記述が見られる。
- (17) たとえば、関正昭 (1997) pp.129-132。
- (18) 長谷川 (2010) によると、この回顧録は、発刊20周年記念の『英語青年』第39巻第2号 (1918年4月15日発行) に同誌に縁のある諸氏の思い出を特集した中の一つとして本田が寄せた英文のエッセイである。

参考文献

- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編 (1980) 『英語教育史資料』第2巻 (東京法令出版)。
- 河路由佳 (2013) 「戦時期の日本語普及事業と松宮弥平・松宮一也—日本語教師養成事業をめぐる官民論争に着目して—」『日本語・日本語教育の研究—その今、その歴史』スリーエーネットワーク、pp.227-239。
- 小林ミナ (1998) 『よくわかる教授法』アルク。
- 関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク。
- 竹本英代 (2002) 「松田一橘の言語教育」『英学史研究 (35)』、pp.49-64。
- 竹本英代 (2004) 「日語学校創設に果たした在日宣教師の役割」『キリスト教社会問題研究 (通号53)』、同志社大学人文科学研究所、pp.31-52。
- 竹本英代 (2007) 「初代校長フランク・ミュラーと日語学校の教育」『福岡教育大学紀要、第4分冊、教職科編』(56) pp.25-37。
- 竹本英代 (2008A) 「関東大震災後の日語学校の再建—大正期における宣教師に対する日本語教育をめぐる—」『キリスト教社会問題研究 (通号56)』、同志社大学人文科学研究所、pp.243-265。
- 竹本英代 (2008B) 「昭和戦前期の日語文化学校の教育事業」『教育基礎学研究』

- (6)、九州大学大学院人間環境学府教育哲学・教育社会史研究室、pp.15-33.
- 竹本英代 (2010) 「戦前日本における宣教師に対する日本語教育—松宮弥平を中心に」『キリスト教社会問題研究 (通号59)』、同志社大学人文科学研究所、pp.49-71.
- 東京外国語大学史編集委員会 (2000) 『東京外国語大学史 創立百周年 建学百二十六年記念』、東京外国語大学出版会.
- 長谷川勝政 (2010) 「本田増次郎と清国留学生教育—「グアン・メソッド」と「筆談」による日本語教育」『英学史研究 (43)』 pp.1-18.
- 松宮一也 (1941) 『日本語の世界的進出』 婦女会社.
- 土方苑子編 (2008) 『各種学校の歴史的研究』 東京大学出版会.
- 山口喜一郎 (1933) 『外国語としての我が国語教授法』 (発行者：山口喜一郎、印刷：満州日報社印刷所).
- 山下秀雄 (1998) 「現代日本語教育の源流をたずねて [続編] (ii) —戦中期へと向かう時代的背景と長沼直兄の日本語教育」『日本語教育研究』 35号、財団法人言語文化研究所、pp.1-19.
- 吉岡英幸 (2001) 「松宮弥平の『日本語会話』と日本語教授法観」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要14』 pp.103-122.
- Edited by A. P. R. Howatt and Richard G. Smith (2000) "*Foundation of Foreign Language Teaching Vol. VI Gouin, François*" Routledge, London and New York.